

佳作

テーマ：多様性を認め合う社会をめざして
「普通で特別な母」

静岡県立韮山高高等学校1年 清家 冨

「料理はどうしているの？」

「お母さんが普通に作るよ」

「普通って、包丁とか火とか大丈夫なの？」

「大丈夫かどうかはわからないけれど、とにかく普通にごはんが出てくるよ」

これまで私が友人と何度も繰り返し話した会話だ。私の友人の多くは、私の母の目が見えないことを知ると、まず私の食生活を心配してくれる。友人は私の見えない母との暮らしが苦勞の多いものだと思っているのだろうが、私が生まれたときから母の目は見えず、私にとって特別なことは何も無いから、いつも友人の期待に応えることができない。

料理に関して言えば、本当に普通だ。私が家庭科の調理実習で使った道具と同じ道具を使って母も調理をしているように見える。友人の期待に応えようと普通ではない状況を探してみても、私の家の台所に不思議なものの特に見当たらない。強いて言えば、母は揚げ物をしないということとお弁当を作らないということくらいだ。揚げ物は「さすがに怖い」とのことで、お弁当は「彩りが悪くてあなたがいじめられるといけないから」とのことである。

両親は、私が「母の目が見えないこと」をどう受け止めていくか心配していたようだ。特に母は、自分の目のせいで私が誰かに傷つけられたらどうしようと不安でいっぱいだったと言った。最近も「今もそうだし、これからもずっとそうだと思うよ」と言っていた。そして、私が自分の母とみんなの母親との違いを初めて認識した日のことを話してくれた。幼稚園に通っていたある日、お迎えの時刻になって幼稚園から出てきた私が「ママ、みんなのお母さんってね、目が見えるんだっ

て！」と言ったそうだ。

ちなみに私は揚げ物もお弁当もきちんと食べている。母ができない、またはやりたくないことを担当しているのは父だ。父はもともと器用な人だったようだ。こんなに料理が上手にできたり好きになったりするとは思っていなかったよ。父本人も母もびっくりしている。もちろん、私も母の手伝いを少しはする。家事を担っている母に不自由があっても家族がそこを補いながら食卓を囲み、だんらんを楽しむことができる。

世の中には母のように見えない人だけでなく、聞こえない人や肢体に不自由がある人、精神や発達に障害を抱えている人などもいる。多くの人が、さまざまな状況や立場で暮らしている。私たちの暮らしの場は家の中だけではない。学校に行ったり、仕事に行ったり、地域や趣味の場で活動したりしている。どんな状況や立場であっても同じように人権が守られなければならないと思う。

2016年4月から障害者差別解消法が施行された。これは公共機関や民間企業に、障害者への不当な差別的取り扱いをしないこと、合理的配慮の提供をすることが求められたものだ。この法律の制定までの流れを調べると、「国連の『障害者の権利に関する条約』の締結に向けた国内法制度の整備の一環」であるようだが、見えない母と暮らす私は、そこに差別があるから法律で解消しなければならなかっただけではないかと思える。

母がさまざまな差別に苦しんできたことを私も見てきたけれど、その差別的解消は、私の家では何も難しくない。「ちょっと目を貸して」というところを私が手伝って、本当は私が自分でやらなければいけないことを「それは見えなくてもできるからお母さんに任せて」というように助け合うことができる。見えなくてもできることはたくさんあり、それは差別の対象にはならない。こんなふうに、私たちの社会も分け隔てなく、共生できる社会になってほしいと思う。

「料理はどうしているの？」

「お母さんが普通に作るよ」

「ああ、そうだよね」

この会話が私の理想だ。